

# 隣 保 館 報

福祉と人権のまちづくり

発行 伊勢崎市立隣保館  
伊勢崎市山王町 1422-1  
TEL 0270-23-3461  
FAX 0270-23-6487

## 人権のまちづくり講演会のお知らせ（オンライン開催 字幕入り）

配信期間：8月18日（月）午前9時から9月16日（火）午後6時まで  
配信期間中は何度でもご視聴いただけます。

演 題：「同性カップル 弁護士夫婦のカラフルデイズ」  
～LGBTQ のこと、僕のこと、あなたのこと～

講 師：南 和行さん（弁護士）

申 込 み：8月1日（金）午前9時から9月16日（火）午後4時まで  
下記 URL または QR コードから申し込んでください。

申込フォーム <https://logoform.jp/form/Gpfu/1044457>

※お申し込み後、視聴用 URL をご登録いただいたメールアドレスへ送信いたします。

※インターネット通信費用は参加者様のご負担となります。

オンラインでの視聴が難しい方のため、8月22日（金）午後2時から  
隣保館で視聴会を行います。申込は8月7日（木）から隣保館へ  
お電話ください。



法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会主催

第43回全国中学生人権作文コンテストから

法務事務次官賞 受賞作品『小さな叫びを大きな叫びに』

沖縄県 南城市立玉城中学校の生徒の作品

「かわいそう」 私は今まで数え切れないほどこの言葉を浴びてきた。家族のことを話すと、決まってこう言われる。いつからか私は予防線を張るように嘘をつくようになった。「かわいそうな子」というレッテルを貼られるのが怖かったから。「親に愛されてる子」じゃないと輪に入れてもらえないと思ったから。弱さも見せる強さも嫌われる勇気も私は持っていない。

私が生まれて間もない時から両親は共働きで、私はよくおばあちゃん家に預けられていた。そんなおばあちゃんも体が弱く、私と遊べる余裕も無かったので、私は一人でテレビを見たり、人形と遊ぶのが日課だった。小学校に上がると、ずっとおばあちゃん家にいるわけにもいかないからと鍵を持たされた。休日朝起きると自分一人しかいないことも夜寝る時誰もいなくて、お母さんの枕を抱いて寝ることも当たり前だった。なのである程度のことは何でも一人でこなしてきた。両親がギャンブルで家をあけることも多かったので、風邪をひいても一人でぐにやぐにやの天井を見つめることしかできなかった。テストでいい点を取って帰っても見せる人などいないの

で全部ゴミ箱へ捨てていた。あの時ほど自分を哀れだと思ったことはない。中学校に上がり初めてのテストで結構いい点を取ることができたので、ウキウキで両親の帰りを待って、テストを見せた。さすがに褒めてくれると思っていたけど、父の口から出た言葉は、「次はもっと頑張れ。」だった。その時、私の中で何かが切れた。それから私は周りが驚くほど荒れた。授業もろくに受けなくなり、ひたすら遊び回って、学校に呼び出されることも多々あった。でもそれはイキっているわけではなく、積み重なった「寂しい」という感情を自分で対処できなくなってしまったから。何をしても認めてもらえない事実と寂しさで押し潰されてしまった。幼少期の経験で、甘え下手になってしまった私の唯一できるかまちょであり、SOSだった。何度も親にぶたれ、理由を聞かれたが、私は頑なに答えなかった。今更寂しいなんて言えるわけがなかった。ある日、私はお母さんと二人で話をした。母は第一声、

「寂しい思いばかりさせてごめんね」

と言った。その瞬間、からからだった私の心に熱がこもっていくのを感じて、私は数年ぶりに母の腕で泣いた。母は幼少期、欲しいものがあっても全然買ってもらえず、ずっと我慢してばかりだったので、自分の子供にはお金の面で不自由な思いはさせないと決めていたらしい。だから仕事もできるだけたくさんやって、バイトもしていたと話された。私は初めて弱音を漏らした。

「私が欲しかったのはお金じゃない。私は仕事終わり疲れているのにボロボロの見た目で授業参観に来てくれたり、運動会でうれしそうに私を撮ってくれたりすることがすごくうれしかった。」そう言うとも母は今まで見たことがないほど泣いていた。今の時代、子どもへの育児放棄などが問題視されているが、家庭内の問題はあまり気づかれない。子どもが相当なSOSを出さない限り救われない深刻な状況だ。私は虐待されたとは思わないが、恵まれない環境にいたことは変わりないと思う。私は、人に甘えることが下手で頼ることが苦手だった。だから、すごく重たい荷物を一人で運んでいるような感じで苦しかった。なので、もし誰かが苦しんでいた、辛い思いをしているのなら、私は迷わず手を差し伸べたい。それで少しでも心に温かさを取り戻せるのなら私は力になりたい。今も、どうしようもない感情で自分自身を失い、寂しさと孤独感で潰されている子が何人もいると思う。「寂しい」という感情を消化できず、道を踏み外してしまう子も少なくありません。子どもが求めているのはお金ではなく、家族との時間です。親によって空いた穴は、親でしか埋められません。今も親の温かさを求めて、小さく叫び続けている子どもがいる。どうか、このことを忘れないでください。

この深刻な家庭内問題は、大人でしか解決できません。子どもは、ただSOSを出すことしかできません。だからこそ考えてほしいんです。子どもの未来を。子どもの幸せを。心の行き場のない子どもを減らすことができるのは大人であり、親であるあなた達です。私も一人の子どもとして戦い続ける。弱さを見せる強さと嫌われる勇気を持って。



「隣保館報」…人権・同和問題を扱った記事を主体に年4回発行。人権・同和問題を見つめてもらうため、日常的な問題に焦点をあて市民の皆様へ理解と関心を高めてもらうための広報活動です。皆様の人権に関するあたたかいご理解をお願いします

